

みんなあでつながる！ひろげる！地域のチカラ

# プラットふくし

こ

う

ち

高知県社会福祉協議会広報誌



2021  
**8**月号  
vol.1

特集

## コロナ禍に負けない！ つながる！ひろげる！ 地域のチカラ

### contents

ボランティア・NPO情報 てをつなGO! ——	6
GO!GO! こども食堂	
シニアのちょっといい話 ——	8
居場所ファーム   土佐町あったかふれあいセンター	
プラットこうち人 小松沙季さん ——	10
高知県社協からのお知らせ ——	11
創刊に寄せて ——	12



巻頭特集

# コロナ禍に負けない!

## つながる! ひろげる! 地域のチカラ

新しい「集い方」と  
利用者さんへの  
アプローチを模索

コロナ禍ならではの  
取組で広がる  
地域のつながり

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たち福祉関係者にも様々な面で大きな打撃を与え続けています。このような困難な情勢にあっても試行錯誤しながらさまざまな取組を行っている団体を今回の巻頭特集では取材しました。

生活困窮者への食料支援や地域における住民同士のつながりづくり、福祉施設における利用者やご家族へのサービスの工夫など、コロナ禍のなかでどのような方法で、どのような内容で取組を行っていくべきか、それぞれの地域や現場で知恵を出しあいながら「今、できること」を模索しています。

困難にみちた今だからこそ、私たち福祉関係者はこれまで培ってきた経験とネットワークを生かし、人々の暮らしの様々な場面に福祉の視点を取り入れた取組を進めていかなければいけません。

- たとえば、困っている人に気づき、必要な支援につなげる。
  - たとえば、地域の福祉活動を通して、人の心も身体も元気にする。
  - たとえば、人々がつながり続けられる新しい方法を考える。
  - たとえば、誹謗中傷や差別のない人々の福祉の心を育む。
- コロナ禍を乗り越える活動が広がることで、活動に直接関わる人だけでなく周りの人の福祉の心が広がっていくのだと実感しています。

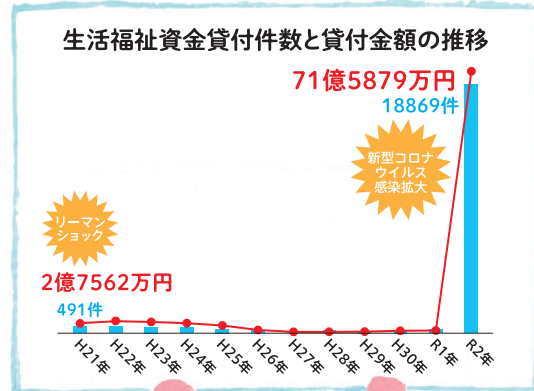
次々と生まれる  
コロナ後を  
見据えた試み

### 雇用と 収入への 打撃

# 1

全国と同様に、高知県でも新型コロナウイルスの感染者数が増えるたびに行動の自粛を余儀なくされ、消費は急速に冷え込みました。その結果、コロナ禍以前から1人当たりの所得が全国と比較すると低位にある県下では失業者数が急増し、生活に困窮する人が増加しました。

令和2(2020)年3月25日から開始された「生活福祉資金特例貸付」においては高知県でも申込が殺到し、6月末時点で2万2千件を超えて貸付額は87億円を超えています。私たち福祉関係者は、コロナ禍で増加した生活困窮者の就労や生活等を支援していく体制づくりを進めていく必要があります。



### 地域の 福祉活動への 打撃

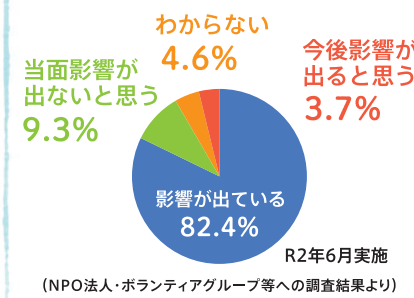
# 2

人と人が実際に顔を合わせ交流を重ねる地域の福祉活動は、コロナ禍の拡大に伴ってその機会をストップしたり縮小せざるを得ない状況となり、県内のNPO法人・ボランティアグループ等を対象とした調査では8割以上の団体が事業・活動の実施への影響があったと回答しています。

地域の高齢者が集まって体操、食事、交流等を行う「ふれあいサロン」では、参加する高齢者だけでなく支える側のボランティアにとっても生きがいを感じることにつながり、身体の健康のみならず心の健康につながるといわれています。

私たち福祉関係者は、コロナ禍で多くの人があらためてその重要性に気づいた地域の福祉活動を再び盛んにしていく必要があります。

新型コロナウイルス感染拡大による  
事業実施への影響



### 人々の 心への 打撃

# 3

感染した人への非難や誹謗中傷、医療・福祉の最前線で働く人々への差別や偏見は、目に余るものがあり、当事者はもちろん、周りの人の心をも大きく傷つけました。

一方で、クラスターが発生した施設への応援や、医療・福祉従事者への感謝の声やメッセージが寄せられる光景は、人々の心を安心させ温かくさせました。

私たち福祉関係者は、このコロナ禍の出来事を教訓とし、人々が気遣い合い、助け合い、支え合える地域社会を目指して様々な取組を進めていく必要があります。





宿毛市社会福祉協議会

# コロナ禍ならではの 取組で広がる 地域のつながり



コロナ禍に見舞われるようになって以来1年余り。この間、宿毛市社会福祉協議会に寄せられた貸付相談は例年の約10倍にも及ぶそうです。

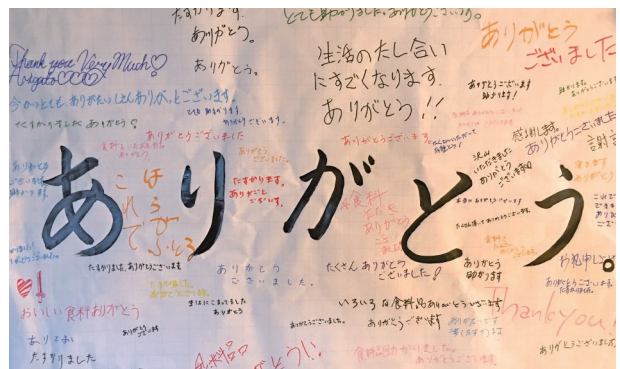
「自分には何も無い。どうしていいかわからない」  
「収入が減り日々の支払いも重なって食料を買うお金がない」  
相談者の立場や状況はいずれも非常に苦しく、なかには貯蓄も底をつき食料もないという方が多くおられることがわかり、社協としても何かできないかとの思いで協議を重ねるようになりました。

### つながりを切らさないために

その結果、まずは食料の提供を行うことが重要との判断から、「フードドライブキャンペーン」を実施するに至りました。市民同士「お互い様」の意識を育むことができるよう、実施にあたっては市内7法人が参加する社会福祉法人連絡会や市内民間企業にも協賛をいただき、各施設・事業所の職員さんから食料の寄付を受けるなどして準備を整えました。

### 市民からの支援の輪をこれからも

集まった食料は宿毛市総合社会福祉センターに特設した会場で配布。来場した一人一人に基本セットがいきわたるように準備したうえで買い物を楽しむような形で食料を選ぶことができるようにし、選んでいるときに雑談を交えながら現在の状況をヒアリングできるように工夫を凝らしました。  
宿毛市社協では、今回の取組を踏まえ、これからも「つながる、つながり続ける」をモットーに支援が必要な人に対して支援の輪を広げていくべく取り組んでいくとのことです。



来場者からは、「ありがとう」を思い思いの言葉で表現した大きなメッセージが



# 新しい「集い方」と 利用者さんへの アプローチを模索



黒潮町社会福祉協議会  
特定非営利活動法人 しいのみ



# 次々と 生まれる コロナ後を 見据えた試み

特別養護老人ホーム  
ウエルプラザ高知



オンライン面会システムでは直接ふれあうことはできませんので、ホームで過ごす入居者の写真を手紙に同封するなどして、入居者の高齢者が安全に、幸せに暮らしていることをご家族にお伝えするように努めています。

グローブ、スライディングシート、リフトといった福祉用具を用いるノーリフトケア。今年1月には高知県知事から高知家ノーリフトケアフォーラム最優秀賞を受賞しました。

**高**知市一宮にある特別養護老人ホームウエルプラザ高知。80名の高齢者が暮らすこの施設では、新型コロナウイルスへの感染が施設内で発生すると一気にクラスター化する可能性があるため、施設内にウイルスを持ち込ませないよう対策を強化しています。

対策は大変ですが、その中から、高齢者が安心して暮らし、職員が安全に働くことができるアフターコロナにつながる新たな取組が生まれています。

### コロナ禍の中でアフターコロナに向けた取組も

県のコロナ対応ステージが「警戒」以上になるとご家族でも面会できなくなるため、自室におられる入居者の方とご家族との面会を大型モニターを通じて行う「オンライン面会」を実施するようになりました。直接ふれあうことはできませんが、画面越しの会話を楽しむことで感染などを心配することなく安心して面会することができます。

いっぽうで、スタッフ間での対面接触を減らすために会議の内容や回数も見直し。その結果残業も減り、結果として施設全体の「働き方改革」が進んだそうです。

コロナ禍がもたらした新しい取組はこれだけではありません。「抱えない、持ち上げない、引きずらない介護」を行うノーリフトケアにも積極的に取り組むようになりました。用具の正しい使い方や姿勢などの研修も毎週開催することで定着を図り、結果として職員にとっては悩みのタネであった腰痛予防に、入居者にとっては介護時の姿勢の安定による受診の減少につながっているそうです。

コロナ禍はたしかに多くの制約を強いていますが、一方で新しい取組を後押ししてくれた側面もあります。これらの取組をこれからもきちんと定着、拡大させていくことが大事といえるでしょう。

**黒**潮町では「あったかふれあいセンター」が計6地区で運営されており、住民が集まるための交流や体操、訪問による地域住民の困りごとの把握を行っています。

### コロナ禍の影響と苦悩

しかし、コロナ禍で人々が「集まる」ことが制限され、センターの活動は大きな見直しを迫られました。日々集まることを楽しみにしていた利用者のなかには体力や気力の低下がみられる方も見受けられるようになり、センターを運営する社協、NPO、行政で今だからこそできる取組の検討を重ねることになります。

たどりついたのは従来の送迎を行って1ヶ所での《集い》を開く方法から、より地域に近い拠点(サテライト)で少人数で集まることで取組を継続するという方法。こうすることにより、これまで参加していなかった方が参加してくれるようになり、近くの住民から利用者のことを気にかけてもらうことができるようになるなど、結果としてコロナ前よりも「新しいつながり」が増えたそうです。

また、利用者の皆さんから届く「集まりたい」「会いたい」の声に応えるために、220世帯にも及ぶ利用者に対しフラワーポットを手渡しに出向いたり、気になる利用者には訪問活動などを行い、利用者の現状や地域の課題を把握することに努めました。

### スタッフの思いが地域のカタチへ

これらの活動は、「利用者の声や思い」に応えたいというスタッフの思いが、「コロナだから集まらない」という固定概念を打ち破った新しい地域のカタチといえます。地域にあふれる思いをセンターを中心に社協、NPO、行政が一体となって下支えをすることで、新しいつながり、新しい地域活動の展開が見えてきたのです。

スタッフの方からは、「利用者が楽しんでいる姿を見ていると私たちも楽しいし、元気をもらえる。参加できる人数に制限はあるがそのなかでできることを考え、地域の皆さんの生きがいや気持ちをつなげる運営をしていきたい」との熱い思いをお聞きました。



生きがいつくりのため、利用者220世帯にフラワーポットをお届け





誰でも  
来ていい  
みんなの  
居場所！

学年や学校の壁をこえ、みんなでなかよく学習タイムも



多い日は150食にもなるお弁当は  
6人のスタッフが手際よく準備していきます

誰もが  
集える、  
まちの  
お茶の間

無料または安価な値段で子どもたちに食事を提供する場として、近年全国的な広がりを見せている「子ども食堂」。

高知県では2016年ごろから徐々に数を増やしはじめ、現在では約80か所もの「子ども食堂」が開設されています。

誰もが集い、つながることができ、安心して過ごすことができる「居場所」、子ども同士や地域の大人とのコミュニティの場としての機能も担う子ども食堂ですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、従来のように一堂に会して食事をすることが難しくなりました。

『ボランティア・NPO情報てをつなGO!』第一回の今回は、つなぐ続ける大切さから様々な工夫を凝らして活動を継続している3つの「子ども食堂」に伺いました。

# GO!GO! 子ども食堂

ボランティア・NPO情報  
てをつなGO!  
vol. 1

世代を超えて  
愛される人の  
交差点



竹内喜美恵さんも一緒に食卓を囲んでお食事タイム  
(写真提供:高知新聞社)

## ミームclub実行委員会

代表:江淵貴子氏(☎090-7579-1663)  
○ミームclub 高知市はりまや町2-11-8(マルコキッチン)  
○みつばち 高知市帯屋町1丁目13-24(室戸屋ジロー3階)  
◎kodomoshokudo\_

はりまや橋と帯屋町という高知市の中心部で2か所の子どもの食堂を運営するのが、「ミームclub実行委員会」。安心して新鮮な野菜を使った食事や多世代の人たちとの出会いやつながりができるみんなの居場所になっています。

こちらの子ども食堂では、ただみんなで食事を一緒に食べるということだけではなく、食育を取り入れた調理体験や音楽やモノづくりなどを通じてさまざまな人やモノとの出会いが生まれる居場所づくりを大切にしてきました。

コロナ禍の現在は、県内の感染状況を注視しながら「お弁当形式」と「従来通りの食堂形式」を併用しながらの開催を続けていますが、子どもから寄せられるのは、「普通に子ども食堂を開いてほしい」という声。この場所に集まることを楽しみにしてくれている子どもたちがいるということに悩みながら、感染予防対策の徹底と工夫を凝らしながらの活動を模索しています。

本来目指している形の子ども食堂の運営はできていませんが、お弁当形式の開催の日には何種類かのお弁当を用意。ただお弁当を持って帰るだけではなく「選ぶ」楽しさを感じてもらうための「一工夫」を忘れません。



## アテラーノ食堂

代表:遠藤 穂氏(☎080-3677-8755)  
高知市元町44(アテラーノ旭)  
☒npoaterano

高知市旭地区でまちづくり活動を行うNPO法人アテラーノ旭が運営する子ども食堂「アテラーノ食堂」。令和元(2019)年10月から子ども食堂をはじめましたが、新型コロナウイルスの影響により4月からはお弁当(テイクアウト)形式での開催となっています。

お弁当形式での開催に変更したことで参加してくれる子どもたちと会う機会が減る心配もありましたが、運営主体であるアテラーノ旭が長年居場所づくりの活動を行っていることから学校帰りの子どもたちが顔をだしてくれることが多いそうです。

また、普段の居場所には来たことのなかった、子どもだけや大人だけの参加が多くなったことでアテラーノ旭全体の利用者数も増加。

他にも、地域のスクールソーシャルワーカーや子ども支援の団体と協力し、学校給食が休みの日には支援が必要な子どもにお弁当の配布を行いました。コロナ禍のなかでも取組の幅を積極的に広げ、つながる人を増やしながらかつ活動がされています。



工夫をこらした献立は  
ふなつきばの子どもの食堂の自慢です

## ふなつきばの子ども食堂

代表:竹内喜美恵氏(☎088-841-3000)  
高知市長浜574-6(アニタ助産院研修棟)  
☒anitabirthhouse

高知市長浜にあるアニタ助産院が開催している「ふなつきばの子ども食堂」。コロナ禍で人が集まるのが制限されるなか、県の感染状況をふまえ最大限できる感染対策を考えながら、従来通りの食堂形式での開催を続けています。

はじめは「誰も来てくれないのではないか」という不安や、周囲からの心配や反対の声もありました。しかし、「一人でも来てくれる人がいるのならば続けたい。コロナだからやめようは違うと思った。居場所やつながりがなくなるの方が問題だ。」との思いから、これまでと同じ形での取組を続けました。

「いつでもだれでも来られる場所であり、世代を超えて交流できる場所が何気ない形で日常の中に必要だ」と竹内さんは言います。人と人の架け橋、交差点になることができる居場所として地域に定着していくことを目指して子ども食堂の運営を行っています。





地域の人がつながる場所を作りたい！  
**居場所ファーム**  
 高知市初月

新興住宅地と田畑が広がる高知市の北部、初月地区。この場所で「地域の人がつながる場所を作りたい」という思いを持ったメンバーが『居場所ファーム』という小さな畑で集っています。

立ち上げのメンバーは、定年退職後に民生委員を始めた村田啓一さんと元久幹雄さん、福祉委員の公文義明さん。村田さんは現役時代、地域活動への関わりはほとんどなく地域のこともよく知らなかったそうですが、民生委員として地域の中で活動するうちに初月地区のために何かしたいと思うようになったのだそうです。

何かしたいと思ったら動かしにくい。高知市社会福祉協議会や高齢者支援センターの職員の力も借りながら、何度か話し合いを重ねました。

そして、まずは地域の人たちが集える場として畑を作ってみることに。定期的に集まって何かをするのはメンバーの負担になりますが、「畑で野菜を作るのなら気軽に集まってできるのでは」というのも理由の一つだそうです。

仲間を増やすために近隣の老人クラブに声かけをし、現在のメンバーである7名とお手伝いの方が数名集まりました。野菜作りのノウハウは、無償提供してくれた地主さんやメンバーに教わりました。収穫した野菜は地域のデイサービスやこども食堂に無償で提供しています。

「この地域には8カ所ほどのデイサービス事業所がありますが、自分たちで作った野菜を届けることを通して、事業所の運営面を含め様々な苦勞があることでほんの少しですが知ることができました。また、事業所の皆さんに大変喜んでいただいたことが、畑作り活動の励みになっています」

と村田さん。野菜作りは、つながる場という機能だけでなく、地域を知るきっかけにもなっています。

「コロナが落ち着いたら、この畑をもっと気軽に立ち寄れる居場所として整備し、もっと地域のつながりを作っていきたいね」

つながることから互いを知り、そして支え合える地域へ。この小さな畑では、そんなメンバーのみなさんの希望の種も育ち始めています。



シニア世代の皆さんが生きがいのあるセカンドライフを送るための参考となるような、県内でいきいきと地域活動をされている皆さんをご紹介します。



左から元久さん、村田さん、公文さん。

自分たちの『やりたい』をカタチに。  
**土佐町あったかふれあいセンター**

土佐町の地蔵寺地区。ここには、自分たちの『やりたい』を叶えていく集いの場所があります。毎月第1・3火曜日、『あったかふれあいセンター』のサテライトとして開催される集いの場がそれ。

日ごろは高齢者や小さい子ども連れのお母さんたちなど25人ぐらいの方が集まってきて活動をしていて、コロナ禍前は昼食もお料理を作りたい人たちが集まって料理の腕を振るっていたそう。併設の畑で採れた野菜はみんなのお昼ご飯になったり、地域で販売したりして、得られた収入でバスを借りてみんなで旅行にも出かけたこともあるのだとか。

コロナ禍はこうした「いつもの日」を吹き飛ばしてしまいましたが、それでも『やりたい』を叶える活動は続けています。

取材でおじゃました日の午前中は、コマ袋でバックを製作していました。親子連れや高齢者の方同士で作り方を教えあい助け合いながら、なんとも楽しそうです。できあがったバックは道の駅で販売することを考えているそうです。

そして、お昼ごはんと体操の後は、「タイラート」と「健康マージャン」のグループに分かれます。この「タイラート」も利用者の方からのリクエストで始めたことのひとつで、作り始めると皆さん真剣になり、無言で黙々と取り組んでいきます。出来上がった作品は自宅に飾ったり販売したりして、旅行や買い物など新たな「やってみよう」を叶える原資となっているそうです。

コロナ禍でできない事もたくさんあるなか、スーパーに買い物に行く交通手段がない利用者のために、タブレットを使った買い物支援を試験的に始めました。社協職員とサポートスタッフがタブレットを持ってスーパーの売り場へ行き、ふれあいセンターにおいてあるタブレットで利用者さんは商品や値札の画像を見ながら日用品やお菓子、生鮮食品などを購入するのです。

「あったかふれあいセンターをいつまでも続けられるようにするためには、自分たち自身で動いていくことが大切です」

あったかふれあいセンターの運営をサポートしている、サロンコーディネーターの山本康恵さんはいいます。

「社協はあくまで地域の人をサポートする役割で、地域の人から《困ったこと》や《やりたいこと》をうまく引き出して、そして適切なアドバイスをして、あとは地域の人たちが自分たちの力でできるよう手助けしています」

自分たちの『やりたい』が叶えられる場所。それを叶えるために、住民自らが動く。みんながいきいきと活動できるのは、そんな環境があるからなのです。



上からコマ袋バッグづくり、健康マージャン、コーディネーターの山本さん、土佐町あったかふれあいセンター



メンバーは近くの公民館で百歳体操やパソコン教室終了後、それぞれのペースで畑を訪れます。「無農薬・無世話」をセールスポイントにつくった野菜は近所のデイサービスセンターなどへお届け。



「タイラート」では、次々とステキな作品ができあがりました。





**第2回ふくし総合フェアを開催します!**

ふくし就職フェアとふくし機器展、そして11月の「介護の日」のイベントを統合して、第2回「ふくし総合フェア」として開催します。

[日時] 令和3年11月19日(金)・20日(土)  
 [場所] 高知ちばさんセンター(高知市布師田3992-2)  
 [問い合わせ先] 高知県社会福祉協議会 高知県福祉人材センター  
 ☎088-844-3511 FAX.088-821-6765  
 E-mail:jinzai@pippikochi.or.jp



**こうちNPOフォーラム2021、今年も開催!**

NPO関係者や関心のある方たちが、活動分野や立場の違いを越えて集まり、コロナ禍における活動の工夫、コロナ禍で見つめ直したNPOの役割等を考えるとともに、団体相互の交流を深め合い、今後の活動活性化を図ります。

[日時] 令和3年12月18日(土)13:00~16:30  
 [場所] こうち男女共同参画センター・ソール  
 [申込締切] 12月15日(水)  
 [申込・問い合わせ先] 高知県ボランティア・NPOセンター  
 ☎088-850-9100 FAX.088-844-3852  
 E-mail:kvnc@pippikochi.or.jp



**車椅子をご寄贈いただきました!**

株式会社レデイ薬局様とクラシエホールディングス株式会社様から車椅子10台を寄贈いただきました。これら車いすは、県内市町村社会福祉協議会が実施している福祉教育事業(車椅子体験学習)や地域住民の方への一時的な貸し出しなど活用される予定です。

**高知県社協からのお知らせ**

**パラカヌー日本代表選手**

**小松沙季さん (26)**

知県四万十市出身、小学2年生から地元中村でバレーボールを始め、その後は小中高、大学までバレーを続け、卒業後はV2リーグ(アレス浜松)でアスリートとして活躍していた小松さん。  
 そんな彼女は2年前、突然車いすでの生活を余儀なくされる。

**障害者:でも何も変わらない**

2019年6月、その日は普段と違う脱力感があり、寝ている間にほとんど脱力感が増していき、次の日には立ち上がれなくなった。当初驚きはあったが、治療すればすぐに良くなるはずと、約1年程リハビリに励んだ。

元々アスリートの彼女は、運動もできずにじっと過ごす日々耐え切れず、足を使わずとも運転できるような車を手動運転に改造。その後直ぐに広島県のジムへトレーニングに向かった。  
 「困る事も多いし何かするにも人より時間がかかるけど、1人の人間としては障害をもつ前と何も変わらない。不自由が増えた事で、逆にどこまでトライできるのか、色々な事に興味を持つようになりました」  
 障害者となった彼女は明るく話す。

**プラット  
こうちズ  
VOL.1**

**アスリート熱再び**

カヌーに出会うきっかけとなったのは、自分の可能性に挑戦するため、2020年12月に広島県で行われた、日本スポーツ協会主催のアスリート発掘事業(ジャパンライジング・スタープロジェクト)への参加だった。バイタリティ溢れる彼女の行動がきっかけとなり、持ち前の明るさと身体能力で次のステップへと進んでいく。

2021年2月、競技用カヌーに初乗艇。3月、本格的にトレーニングを開始し、その月末には海外派遣選手選考会でワールドカップへの出場権を獲得。5月に開催されたハンガリーでのワールドカップで世界第5位となり、競技歴わずか2カ月で東京パラリンピック出場への切符を手に入れた。

瞬く間に競技のトップクラスへと上り詰めた、当時は周りの評価に気持ちがついていかなかったが、時を経るごとに「やるしかない。やってみようぞ。」という気持ちに少しずつ変わっていった。彼女の中で、再びアスリートとしての熱が燃え始めたのだ。

**チャレンジするだけで見えるもの**

小松さんの頑張る理由。そこには、地元高知の障害のある方々への想いも込められている。「メダルを



2016年リオデジャネイロ大会からパラリンピックの正式競技となったパラカヌー。障害物のない直線コースでパドルを使ってカヌーを漕ぎ、速さを競う。写真提供:日本障害者カヌー協会



獲る事、頑張る事で説得力のある人間になりたい。そして県内の障害者スポーツの発展に貢献したい」といふ。

「障害のある事に引け目を感じる必要はないし、障害も含めてみんなが素敵。だから、どんどんやりたい事にチャレンジしてほしい。トライする事で新しい面や可能性に気付くかもしれない。みんなが安心してチャレンジできる理解ある環境が当たり前となるよう、地域の方々にも協力してもらいながら、私もその手助けが出来ればと思います。」  
 明るく突き進んでいく彼女の挑戦は、まさに始まったばかりだ。

令和3年度 **しせつの損害補償** インターネットで保険料試算できます  
 社会福祉施設総合損害補償

老人福祉施設、障害者支援施設、児童福祉施設の **事故・紛争円満解決のために!**

プラン1 **施設業務の補償** (賠償責任保険、動産総合保険等)

▶保険金額		年額保険料(掛金)			
	基本補償(A型)	見舞費用付補償(B型)	定員	基本補償(A型)	
賠償事故	身体賠償(1名・1事故)	2億円・10億円	2億円・10億円	1~50名	35,000~61,460円
	財物賠償(1事故)	2,000万円	2,000万円	51~100名	68,270~97,000円
	受託・管理財物賠償(期間中)	200万円	200万円	100名以降1名~10名増ごと	1,500円
	うち現金支払限度額(期間中)	20万円	20万円		
	人格権侵害(期間中)	1,000万円	1,000万円		
	身体・財物の損壊を伴わない経済的損失(期間中)	1,000万円	1,000万円		
お見舞い等	徘徊時賠償(期間中)	2,000万円	2,000万円		
	事故対応特別費用(期間中)	500万円	500万円		
	被害者対応費用(1名につき)	1事故10万円限度	1事故10万円限度		
	傷害見舞費用		死亡時100万円 入院時1.5~7万円 通院時1~3.5万円		

【見舞費用加算】  
 定員1名あたり  
 入所:1,300円  
 通所:1,390円

プラン2 **施設利用者の補償**  
 プラン3 **施設職員の補償**  
 プラン4 **社会福祉法人役員等の補償**

スケールメリットを活かした **充実した補償と割安な保険料** です。

●このご案内は概要を説明したものです。詳しい内容のお問い合わせは下記までお願いします。●

団体契約者 **社会福祉法人 全国社会福祉協議会**  
 引受幹事 損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部 第二課  
 保険会社 TEL: 03(3349)5137  
 受付時間: 平日の9:00~17:00(土日・祝日、年末年始を除きます。)

取扱代理店 **株式会社 福祉保険サービス**  
 〒100-0013 東京都千代田区霞が関3丁目3番2号 新霞が関ビル17F  
 TEL:03(3581)4667 FAX:03(3581)4763  
 受付時間: 平日の9:30~17:30(12/29~1/3を除きます。)



# 創刊に寄せて

この度、福祉の情報をわかりやすくかつタイムリーにお届けするため、既刊のボランティア・NPOの活動情報紙「てをつなGO」と、セカンドライフ応援誌「タマテバコ」を統合し、高知県社会福祉協議会の新たな広報誌として“プラットフォーム ぷくし こうち”を創刊しました。

全国に先駆けて少子高齢化が進む本県では、深刻な過疎化とも相まって、多くの地域で困難な状況に直面しています。

また、昨年からの長引くコロナ禍は、経済的な格差の拡大に止まらず、地域社会の様々な分野において大きな負の影響を与えており、地域で暮らす方々が抱える生活の課題は、複雑・多様化を見せるとともに、これまで以上に社会的な孤立や生きづらさといった問題を深刻化させています。

令和2年3月25日に開始された「生活福祉資金特例貸付」は、3年6月末時点で件数が2万2千件を超え、決定金額も87億円超に上るなど、コロナ禍までは普通に暮らしていた人々に大きな経済的負担をもたらしています。

また、令和2年の自殺者数が11年ぶりの増加へと転じ、家族や家庭の状況が見えづらくなる中で、児童虐待やDV問題の深刻化といったことが懸念される一方で、コロナ禍以前から困窮状態にあったと考えられる8050世帯や就職氷河期世代の存在、不安定な就労環境に置かれた外国人労働者、さらには、生理的貧困やヤングケアラーなどといった新たな課題も顕在化しています。

こうした中、創刊第1号では「コロナ禍に負けない!つながる!ひろげる!地域のチカラ」をテーマに、県内の地域福祉活動の取組の“今”をお届けすることとしました。

ウイズコロナを前提とした新しい生活様式のもとでは、“集う”“訪問する”“伴走する”といったこれまでの地域福祉活動の持ち味も自ずと制限され、従来型の対面的な活動を中心とした支援は困難な状況にもあります。

しかしながら、こうした状況の下においても、県内では、これまでに紡いできた「地域の絆」を途切れさせないための工夫や、新たな「絆のネットワーク」を紡ぐ様々な活動が生まれており、好事例をいくつか紹介させていただきました。

いずれの取組も、社会の構造や人々の暮らしを取り巻く環境の変化をしっかりと捉え、これまでの「縦割り」の制度や、「支え手」「受け手」といった一方通行的な関係を越えて、誰もが地域社会でそれぞれの役割を果たしながら暮らすことのできる『地域共生社会』の実現にも繋がる取組と言えます。

新たな広報誌では、こうした地域福祉活動が大きな転換期を迎える中、地域住民の方々と福祉関係者の皆様の間で確かな「絆のネットワーク」が紡がれる誌面づくりを目指してまいりますので、ご愛読をよろしく申し上げます。



## 社会福祉法人 高知県社会福祉協議会

高知市朝倉 375-1 県立ふくし交流プラザ内  
TEL.088-844-9007 / FAX.088-844-3852  
E-mail plaza@pippikochi.or.jp

<https://www.kochiken-shakyo.or.jp/>



### ふくし交流プラザへの交通のご案内

[お車でお越しの方]高知駅より車で約20分、高知ICより車で約30分、伊野ICより車で約15分、高知龍馬空港より車で約50分。

駐車場:普通乗用車で約180台駐車できます

[公共交通機関でお越しの方]最寄りバス停「朝倉第二小学校前」下車すぐ

